

# 地 引 御 書

弘安四年十一月二五日 六〇歳

坊は十間四面に、またひさし<sup>底</sup>さしてつくりあげ、二十四日に大師講並びに延年、心のごとくつかまつりて、二十四日の戌亥の時、御所にす<sup>いぬい</sup>ゑして、三十余人をもつて一日<sup>書</sup>経かきまいらせ、並びに申酉<sup>さるとり</sup>の刻に御供養すこしも事ゆへなし。坊は地<sup>引</sup>ひき、山づくり候ひしに、山に二十四日、一日もかた時も雨ふる事なし。十一月ついたちの日、せうばう<sup>小</sup>つくり、馬<sup>屋</sup>やつくる。八日は大坊<sup>柱</sup>のはしらだて、九月十日<sup>葺</sup>ふき候ひ了んぬ。しかるに七日は大雨、八日九日十日はくもりて、しかもあたゝかなる事春の終はりのごとし。十一日より十四日までは大雨ふり、大雪<sup>ふ</sup>下りて、今に里にきへず。山は一丈二丈雪<sup>凍</sup>こほりて、かたき事かねのごとし。二十三日・四日は又そらは<sup>空</sup>はれてさむからず。人のまいる事、洛中かま<sup>さるとり</sup>くらのまちの申酉の時のごとし。さだめて子細あるべきか。

次郎殿等の御<sup>公</sup>きう<sup>達</sup>だち、を<sup>親</sup>やの<sup>いぬい</sup>をほせと申し、我が心にいれてをはします事なれば、われと地をひき、は<sup>柱</sup>しらをたて、とうひやうえ・むまの<sup>藤</sup>入道・三郎<sup>兵衛</sup>尉等已下の人々、一人も<sup>疎</sup>そ<sup>略</sup>ろ<sup>義</sup>のぎなし。坊はかま<sup>が</sup>くらにては一千貫<sup>貫</sup>にてても大事とこそ申し候へ。たゞし一日経は供養し<sup>さ</sup>して候。其の故は御所念の叶はせ給ひて候ならば供養し<sup>は</sup>て候はん。なにと申して候とも、御<sup>祈</sup>き<sup>念</sup>ねんかなはずば、<sup>ことば</sup>言のみ有りて実なく、華<sup>果</sup>さいてこのみなからんか。いまも御らんぜよ。此の事叶はずば、今度法華経にては仏になるまじきかと存じ候はん。叶ひて候はゞ、二人よりあひまいらせて、供養し<sup>は</sup>てまいらせ候はん。神<sup>習</sup>ならは<sup>祈</sup>すは<sup>祈</sup>ねぎ<sup>宜</sup>からと申す。此の事叶はずば法華経信じてなにかせん。事々又々申すべく候。恐々。

十一月廿五日

日 蓮 花 押

南 部 六 郎 殿